世界があるから英語が楽しい

加藤 亜紀子

現在の勤務校等
愛媛県松山市立たちばな小学校

在外での勤務校／帰国年月
バンコク日本人学校／ 2008 年帰国

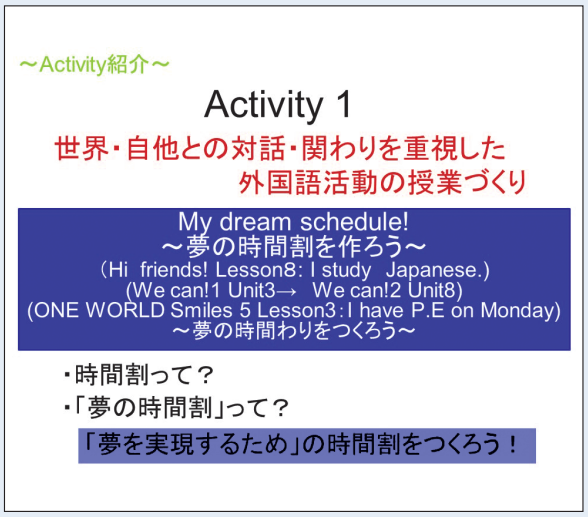
国際理解教育の理念をベースにした外国語の授業をつくり、実践している。身近な話題や自身の経験から「世界っておもしろい！」と感じさせて、そこにかかわりたいという意欲を喚起し、「この面白い世界を知るためには、伝えあうためのツールとして言語が必要」という外国語の学びのモチベーションにつなげていく。それが、言語獲得のコアになる、と思っている。

実践・活動の内容

バンコク日本人学校（タイ）から帰任した翌年、愛媛県の事業で「授業のエキスパート」として外国語活動拠点校に異動し、外国語の取り組みとして以下のような実践をおこなった。

● 実践１　夢の時間割を作ろう

自分の夢を実現するためにどんなことを学ぶかを、自分で考えて時間割にする。できるだけ英語を使い、本人、グループ、なりきりなどの方法で発表する。



● 実践２　ワールドパフェをつくろう

世界の果物を題材に、国語科・社会科・家庭科の単元と連携させて展開。まずは自分のために、誰かのために、そしてみんなでひとつのワールドパフェを作っていく。

～Activity紹介～

Activity 2

～英語ノートLesson6「外来語を知ろう」～
「Let's make world parfait! 」ワールドパフェを作ろう！
※「What do you want?」→Let's Try!2 Unit7

～単元の流れ～
① 身の回りの外来語について知る。
・ 果物の名前→言い方の違い→世界の果物→ワールドパフェ
② パフェを作るために必要な会話の方法や果物の言い方を知る。
③ 自分のパフェを作る。
④ 誰かのためにパフェを作る。
⑤ みんなでひとつの「ワールドパフェ」を作る。

導入時の児童の反応とその後の活動

「果物」→「食」＝「文化」として扱う
↓
世界の果物や食べ物への興味→知りたいという思い
↓
調べる
・ 自主学習　・ 国語科「和語・漢語・外来語」
・ 社会科「わたしたちの国土」「食料生産」「米作り」
・ 家庭科「はじめよう、クッキング！」「ごはんとみそ汁」・・・との関連

ワールドクイズ・ワールドコーナー ・・・知らないよね。→知ってるかな？→知ってるの？→知ってるんだ！

● 実践３　好きな服を着て Let's go!

衣服を文化としてとらえ、実際に着用することで世界の国々への関心を高め、知る意欲につなげていく。また、自分のスタイルをつくって、誰にどこに何をしに行きたいか発表する。

～Activity紹介～

Activity 3

～Hi,friends!Lesson5「What do you like?」～
「My world style!」 好きな服を着てLet's go！
※「What ～do you like?」→Let's Try!1 Unit4,5

～単元の流れ～
① 「衣服」について考える。（文化として捉え、それに反映される地域性や特色、個性を意識する）
世界のいろいろな衣服についての情報を提示したり集めたりした後、実際に身に付けてみることで世界の国々への関心を高める。
② 色や形、好きなものを尋ねる言い方を知る。
③ My world style を作る。
④ 誰かの〇〇world style を作る。
⑤ その服を着て、一緒にどこへ何をしに行くかを紹介し合う。

・布を巻いて服になるなんておもしろいなと思いました。国によって服の色や形がちがうしそれぞれの特徴があるのも分かりました。

・その国の人になったみたいで楽しい！その国で生活しているのを思い浮かべるともっと楽しくなって、本当に行きたくなりました。

↑単元導入時の様子：これがすべての始まり。世界の国の布や民族衣装を実際に身に着け、文化としての衣服や世界の衣装についての驚きと興味を感じることで意欲と見通しをもつことができた。

加藤 亜紀子

● 実践４　道案内をしよう

図画工作科、社会科、総合的な学習の時間の単元と連携して展開。道案内のために必要な数字や固有名詞などは、ドリル的な活動を一部取り入れて授業中の英語量を増やした。

～Activity紹介～

Activity 4

「道案内をしよう」～世界のどこかで～

～他教科との連携～

※→We can!1 Unit7. We can!2 Unit6

※→ONE WORLD Smiles 5 Lesson6・8
“Where do you want to go?”
“Where is the station?”
ONE WORLD Smiles 6 Lesson5
“What country do you want to visit?”

ALTと共に･･･世界を知る！楽しむ！言葉を増やす！
単元の入れ替えとテーマ設定

Lesson5　　Lesson4

これらの授業づくりにあたっては、まず「世界には面白いことがたくさんある。色々な人がいる。それぞれの文化がある。そこにかかわるために英語が必要！」という意識づけを徹底した。前向きなコミュニケーションのための自己解放として TPR（Total Physical Response：全身反応教授法）などを取り入れ、すべてを英語で行うのではなく要点以外は日本語でも可として「伝える意欲」を最優先とした。その前に「Japanese OK?」と聞くようにして、一瞬でも「英語で言えるか？」を考えるように意識づけた。

評価と課題

これらの実践は愛媛県の事業の「授業のエキスパート」としておこない、愛媛大の教授や英語指導主事から指導を受けた。最初の指導案審議では、「外国語活動よりも人権教育や国際理解教育に寄りすぎているのではないか」という指摘があった。しかし、「世界は面白い、関わる意欲、ツールとしての英語」という取り組みのベースを理解してもらい、多くの学びと指導を得た。

一緒に授業をつくっていった ALT にはとても助けられた。「この授業には英語要素が少ない」「今回は世界要素が少なすぎる」などと意見交換しながら、国際理解と外国語の要素をどのようにからめていくかを検討した。ALT は、学校の中でいちばん身近にいる異文化であり、その個性を引き出し、学校の中での位置をつくることも自身の役割だと考え、教職員とのつなぎを意識した。

授業の中では、児童は活動に夢中になるとやはり日本語になってしまう。「英語で言う」

ことを意識させるベースの手立てやルールが必要であり、英語を面白いと思わせることが必要である。そのためにリズムやチャンツ（一定のリズムに乗せて英語の単語や文章を発音する）を使ったり、英語以外の言語も扱い、言語自体の面白さに目を向けさせたりした。

これまで、外国語活動の中にドリル的な活動を取り入れることには否定的だったが、コミュニケーションをとるためにはやはりある程度のボキャブラリーは必要である。そこで、「【実践４】道案内をしよう」では、国際理解と外国語の要素のバランスをとりながら児童が面白さや達成感を感じる形でドリル的な活動を入れ込んだ。

外国語の取り組みでは、コミュニケーションが得意な子や、反対に文法的なことをきちっとやらないと喋れない子など個人差が生じやすい。検証アンケートをとったところ、真面目に取り組み笑顔で活動しているにもかかわらず、２年間ずっと「楽しくない」にマークした児童がいた。ゲームや歌ではなく、言葉のしくみをきちんと学び、きちんと言いたいというタイプだったのかもしれない。こういう子どもは、文法を学ぶ中学英語以降で伸びる可能性があると思う。面白さの感じ方は、児童生徒によって違っている。

現在は教頭なので外国語活動の実践現場からは離れているが、世界のことを学ぶ小５の社会科や代教で外国語やその他の教科を担当する時間は、子どもたちに最大限に世界を感じさせることを心がけている。

現在の外国語教育は、「話せること」が教科の目的化しつつあるが、その流れがある今だからこそ、英語ありきではなくスタートもゴールも世界、という国際理解の理念は重要だと考えているし、その意見に賛同してくれる声も多い。

子どもや保護者が納得する評価のためには、インタビューテストやペーパーテストは必要だが、それが原因で早期から英語嫌いな子をつくってしまうことを危惧している。また、これまでやってきた「関わりの意欲」を喚起するための導入部分にかけられる時間が少なくなるので、活動のコンセプトが弱まってしまう。子どもたちの学習としての意識が強まることで、ベースにある世界が置き去りになってしまわないようにしたい。そのような状況下で児童の反応を引き出すためには、これらの授業は、普段の様子をよく知っている学級担任と ALT によって実施されるのが良いと考えているし、専科教員も児童理解に力を入れてほしいと思う。

実践に至った経緯と提言

学生時代から世界に興味を持ち、バックパッカーとしてアジアやアフリカを歩き、スポーツ人類学で卒業論文を書いた。小学校教員になってからも毎年のようにアジアを旅し、旅先での見聞を子どもたちに伝えながら、学級経営や校務でも常に国際理解教育の視点を入れてきた。

在外校勤務には早くから興味を持っていたがなかなかそのチャンスに恵まれず、2005年にようやくバンコク日本人学校へ赴任した。大都会なのはバンコクの一部だけで、一歩外に出ると、少数民族や地方の暮らし、匂いがとても面白かった。日常的に市場や屋台に通い、休暇には国境や川に足を運んだ。

タイ北部のチェンマイ補習授業校への出張授業で、国際結婚家庭で母語が定まっていない児童に多く出会った。多様なバックグラウンドを持つ子どもたちを前に、「この子にとって授業とは、勉強とは、教育とは」について考えるきっかけになった。様々な子どもが共

有しているのが学校という場ならば、そこを楽しい時間に、学びの仲間をいい状態にしないといけないと考えた。

３年間で小４、小４、小５を担任。教育熱心な保護者が多く評価されているという緊張感はあったが、教員の努力や姿勢を理解してもらえれば一番の味方になる。すばらしい方々に多く出会い、授業づくり、教材づくりに集中できた環境だった。

イスラマバード日本人学校（パキスタン）から修学旅行でタイにやってきた５人の児童生徒と交流したことは、本当に貴重な体験だった。防弾ガラスの入った校舎や銃を使った避難訓練の様子を知って、学級の子どもたちは衝撃を受けたようだった。同じ海外子女でも国が違えば暮らしが全く違う。その一方で、多くの大切なものと別れて日本を離れて暮らしている子どもたち同士が、想いを共有しあうところもあった。交流の様子を見ながら、恵まれた暮らしをしているように見えるバンコク日本人学校の子どもたちの心情も理解できたような気がした。

小４総合の「現地を知る」単元「見タイ知りタイ学びタイ」は、タイの良いところを探す調べ学習だが、最初のリサーチでは、子どもたちからタイに対して「貧しい」「乞食がいる」などのストレートな言葉が出てきた。そのマイナス意識を払拭するために、日々子どもたちに、バンコクで自分が経験したこと、街の人に助けられたこと、うれしかったことなどを話し、いま自分たちがここで暮らしているのは誰のおかけだろうと問いかけた。アジアの国々との協働は必須であると感じていたし、そのベースをつくりたかった。そのうちに子どもたちの言動がだんだん変わっていくのを実感した３年間だった。

帰任後は、授業内外でますます海外の話題を織り交ぜるようになった。「加藤＝世界」のイメージがあるようで、私が着任する学校では必ず「ワールドクラブ」ができる。世界の遊びや料理を調べて自分たちでやってみたり、言葉を学んだり、ワールドかるたなどの活動をしたりした。どちらかといえば「内向き」の教員が、一緒に活動するうちに海外への関心が高まってクラブ活動を引き継ぎ、自身も積極的に外国語や世界と関わるようになったこともあった。

愛媛県国際理解教育研究会はじめ、様々な場で授業実践報告をしているが、そこで感じるのは「温度差」である。実践のコンセプトや内容を高く評価しつつも、「これは加藤先生だからできること」「わが校での実施は難しい」「時間がない」「準備ができない」という反応が多い。特に現職教員にそのような発言が多いので、日々、現場対応に忙殺されていて、取り組む余裕がないのだろうと思う。

しかし、この実践をそのまま再現する必要はない。コンセプトや実践内容の一部を使って自分なりにアレンジし、「加藤案はこうだが、自分はこうしよう」と実態に即した運用をしてもらいたいし、そうあるべきである。

派遣教員のなかには、赴任国での学校以外の活動に興味を示さなかったり、帰国後の現場への還元や情報発信の意欲を持たなかったりする人もいる。世界には様々な日本人学校があるが、そのすべての学校の派遣教員は、仕事としてある意味「守られた」状態で赴任する。単身異国に乗り込んで自力で仕事を探して生きていくのとは、スタート地点がまったく違う。それを自覚し、様々な場面で「ここが日本と違う」「ここが面白い」と感じて、語りたい、伝えたいことがたくさん蓄積するような３年間を過ごしてきてほしい。そして、そこに生きる子どもたちと、財産として残るような経験を共有してきてほしい。

それを持っていると誰かに話したくなるし、何かをしたくなる。もし伝える場がなくて

も、発信したければ探すし、本当になければ作り出すこともできる。日々の業務に忙しくて発信の機会も時間もなくても、普段のふるまいの背後に世界での経験が見えるような教員になってほしいと思う。

コロナ禍やテロが多発する世界のなかで、今の子どもたちは海外や世界に対して「怖い」「危ない」などマイナスのイメージを抱いているようだ。世界に興味を持たず、世界に出ていく若者が減っているとも報じられている。

しかし一方で、今の子どもたちは、生まれた時からインターネットがあって、世界中の情報が身の回りにあるデジタルネイティブである。興味関心の有無にかかわらず、多くの画像や映像に日常的に触れている環境にいる。つまり、「世界情報ネイティブ」である。

であれば、今の子どもたちは、私たち大人とはちょっと違った視点から、世界をフラットに、ナチュラルに見て関わっていけるのではないだろうか。

そうなったら、また次の課題が出てくるだろう。そこで国際理解教育がやはり必要になる。育てたいのはただ「英語が喋れる子ども」ではなく、英語を必要とする場で自己を発揮し、コミュニケーションを図りながら活躍できる主体的対応力を持った日本人である。受容するだけでなく寛容であり、相手を認め、主張し、落としどころを判断することのできる、「異文化に躊躇しない」日本人。在外経験を持つ自分自身がまずそうありたいし、子どもたちにもその力が身に付くように、国際理解教育の内容や方法をこれからも進化させていく必要があると考えている。